



TWEET

『ママ友』という先入観を変えてくれたママ友

私は人付き合いが得意な方ではなく、休日は友達と出かけるよりも一人でテレビを見てくつろぎ、自分のペースで過ごしている方が合っている。そう思っていた。産前に見たテレビドラマでは、子ども同士を比べたり競い合ったりしてママ同士がドロ沼な関係になっていくのを見た影響もあり、自分が子どもを授かったらママ友は作らずに子どもと二人、お散歩したり絵本を読んだりしてほのぼのと過ごそうと思っていた。私は子どもが好きで、結婚したらすぐに子どもが欲しいと思っていた。

妊娠が分かった時から自分の中に宿った命が愛しくて、自分の手で抱きしめられる日を心待ちにしていた。出産してからも嬉しくて前向きに育児をしていた。体重が伸び悩んだ娘のため、2時間おきにタイマーをかけては授乳を頑張った。

1ヶ月を過ぎた頃に今までよく眠っていたのが嘘のようによく泣くようになった。起きている時はよくグズっては泣き、抱っこかおっぱいをくわえないと落ち着かないようで細切れ睡眠、授乳、抱っここのくり返して日々へとへとだった。授乳間隔が短く、夜も2時間もしない間にグズり出すこともしょっちゅうだったので、グズり始める声が聞こえてくると動悸がしてきて“もう起き上がれないよ！”と心の中で叫んだこともあった。泣き続ける娘を放っておけず重い体を起き上がらせては一緒に泣きたくなる気持ちで娘を抱きしめていた。気分転換にとショッピングモールに出掛けたこともあったが、いつグズり出すのかと思うと早く帰りたくなったり、実際にグズっては授乳室からなかなか出られずに不安になったこともあり引きこもりがちになっていった。

夏の本番に向けて暑くなってきたこともあり、エアコンの部屋から小さな赤ちゃんを出すのに抵抗があり、そうなるにつれて“ここから出られない…”と閉塞感に余計に不安になった。いつまでこのループから抜け出せないんだろうと思うと怖かった。そんな時に思ったのが、同じように今、育児を頑張るママの声が聞きたい。という思いだった。ぐるんぱという存在を知ってからはすぐに電話をかけ走った。

ぐるんぱでは、初めての私を温かく迎え入れてくれた。スタッフの人がママたちとの間をとり持ってくれては、いろいろな人の体験談が聞けて、大変な思いをしているのは自分だけではないことが分かったし、共感してもらえたことで救われた気持ちになった。帰りに「ママ、毎日おつかれさま。毎日来てくれてもいいからね！」と声をかけてもらうと必死に駆け抜けていた自分にこの上ないご褒美を貰ったような気分だった。

それからは、しんどくなったらまたぐるんぱにいつでも行けると思うと気が楽になり、2人きりの時間が依然よりも楽になった。ぐるんぱに通ううちに自分を知ってくれる人ができては一緒に子どもと遊んでくれたり、子育てに関するいい情報を貰えたりと自分にとっても有難い事が多かった。何より娘に笑顔を向けてくれるママや子どもたちの姿を見ると、私の心が癒された。ママ友というネガティブなイメージは、実際には共に育児に励む心強い味方だったということに気付いた。以前の私と同じように、ママ友という存在にネガティブなイメージを持つ人がいたら言ってあげたい。「一緒にぐるんぱに行こう。」と。

木辻 史

このコーナーはぐるんぱママの「つぶやき」を随時掲載します。お楽しみに！投稿も大歓迎です！